The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『源氏物語』と中世王朝物語、その変容と隔絶
Author(s)	藤井, 由紀子
Citation	語文. 2006, 87, p. 15-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69079
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『源氏物語』と中世王朝物語、その変容と隔絶

藤井由紀子

はじめに

中世王朝物語を読み解く際、先行する物語からの影響を考えることは避けて通ることができない課題である。安達敬子氏が「読解の基礎作業としては、まず他の物語作品との類似をあらいだし、それが作品の内部に持つ意味を考えることが相変わらず最優先されなくてはならない」[1]と述べる通り、近年、〈物語取り〉という手法として再評価されている他作品からの引用・模倣箇所の検討は、依然として中世王朝物語研究の急務としてある。

中世王朝物語相互の関係性までもが視野に入りつつある現在、『源氏物語』の影響箇所については、既に細部にわたって出尽くした感もあるが、しかし、すべての物語作者たちが等しく『源氏物語』を享受していたかとなると、そこには大きな疑念が差し挟まれる。辛島正雄氏は、『木幡の時雨』における「女三の宮の立ち姿」という表現が、『源氏物語』原典からの影響ではなく、『源氏小鏡』を介した二次的享受によるものであるという可能性を指摘し、「そうした理解のありかたが、やはり、まぎれもなくひとつの《源氏物語》享受の姿であったことも、忘れてはなるまい」[2]と述べる。だとすれば、従来、単に『源氏物語』との類似が指摘されるだけであった箇所についても、さまざまな可能性を視野に入れた上で、再検討を加えていく必要があるだろう。

本稿では、物語の表層にあらわれたいくつかの表現に着目することによって、表現史における『源氏物語』の影響を考えていくこととする。『源氏物語』が物語の表現史において達成したものを、後代の物語は、いかに享受し、いかに再構成しているのか。あるいは、何を引き継ぎ、何を引き継がなかったのか。それは中世王朝物語の特徴を照らし出すとともに、『源氏物語』が物語史において確立したものとは何であったのかということも浮かび上がらせることになると考えるからである。

一　〈源氏物語取り〉の実相

まず、中世王朝物語における〈源氏物語取り〉の様相を確認するために、「海人の子なれば」という表現を視座に、考察を進めていきたい。

まず、『源氏物語』の用例を挙げておく。

A「つきせず隔てたまへるつらさに、あらはさじと思ひつるものを。いまだに名のりし給へ。いとむくつけし」とのたまへど、「海人の子なれば」とて、さすがにうちとけぬさま、いとあいだれたり。（二一〇頁）

夕顔巻、名乗りを求める光源氏に対して、夕顔が「海人の子なれば」と答えるくだりである。この表現は、『和漢朗詠集』の「白波の寄するなぎさに世を過ぐす海人の子なれば宿もさだめず」（巻下・七二一）を引き、光源氏の問いをはぐらかす内容となっていることは周知の通りである。

中世王朝物語においても、これと類似する表現を散見することができる。『木幡の時雨』の例を挙げておく。[3]

時雨はれやらで、三四日も過ぎ行けば、「なほ誰とか名のり給へ。尋ね行くべきしるしにだに」とのたまへば、「海人の子にし侍れば」とて、とけやらぬもことわりにて、……（一八七頁）

関白の子息である男君からの問いかけに、零落した女君が答えるセリフの中に、「海人の子にし侍れば」という表現を見出すことができる。ここでは、男女の身分差以外にも、「なほ誰とか名のり給へ」という男君のセリフや、「とけやらぬもことわりにて」という女君の態度までもが夕顔巻と極めて類似したものとなっており、『和漢朗詠集』からの引用ではなく、明らかな〈源氏物語取り〉と考えるべきものであろう。[4] 中世王朝物語において、「海人の子なれば」に類する表現は、身分違いの恋を表す一種の符牒として、類型的・慣用表現的に享受されていたことが確認できる。

さて、『源氏物語』夕顔巻には、もう一例、「海人」に関わる表現が見出せる。

B右近を召し出でて、のどやかなる夕暮れに物語などし給ひて、「なほいとなむあやしき。などてその人と知られじとは隠い給へりしぞ。まことに海人の子なりとも、さばかりに思ふを知らで隔て給ひしかばなんつらかりし」とのたまへば、「などてか深く隠しきこえ給ふことは侍らん。いつのほどにてかは何ならぬ御名のりを聞こえ給はん。……」と聞こゆれば、……（一三七頁）

夕顔が急死した後、光源氏は右近を呼び出し、あらためて夕顔の素性を問う。その光源氏のセリフに、「まことに海人の子なりとも」の表現を見出すことができるだが、この表現もまた、中世王朝物語に引き継がれている。『しのびね物語』の例を挙げておく。

しめやかなる夕つかた、御乳母を召して、「さてもいかなる人の御子にておはするぞ。海人の子と聞きたてまつるとも、

おろかに思ふべきにもあらず。心深く隠し給ふこそつらけれ」とのたまへば、「なににかは隠し給はん。いつのほどに又御名のりをし給はん。……」と聞こゆれば、……

（三六頁）

「海人の子と聞きたてまつるとも」という表現のみならず、「夕つかた」という時間設定、「御乳母を召して」という状況設定、また、乳母のセリフの内容まで、ここには明らかな〈源氏物語取り〉を認めることができるはずである。しかし、この『しのびね物語』と夕顔巻Bの場面には、決定的な相違点が存在しているのである。それは、Bの場面は、先に見たAの場面を受けるものであり、生前夕顔は自身を「海人の子」にたとえていたが本当にそうであっても構わない、と解釈できるくだりであるのに対し、『しのびね物語』は、Aに該当する場面を持たない、という点である。

たしかに、Aに相当する場面がないからといって、『しのびね物語』が読めなくなるかと言えばそうではない。事実、「海人の子と聞きたてまつるとも」の表現が唐突なものとならないよう、その直前には、「いかなる人の御子にておはするぞ」という発問があらたに置かれ、整合性が図られているし、夕顔巻Bの場面にあった「まことに」という、Aの場面を直接受ける語が、『しのびね物語』においては恐らく意図的に排除されていることを見逃してはならないだろう。『しのびね物語』は、全編において〈源氏物語取り〉が多く、それを換骨奪胎することによって、独自の物語世界を作り上げている作品である。[5] 今見た場面も、いわばそのような『しのびね物語』の典型的な手法を表しているのかもしれないが、しかし、そのような原典からの〈ずらし〉こそが、『源氏物語』からの隔絶に繋がりはしないだろうか。

たとえば、平安後期物語である『夜の寝覚』（原作）にも、同様の事例を見ることができる。

a「いかがはせむ。かかるべき宿世にこそはあらめな。中納言などの心とどめたまふやうもあらば、さばかり、いかなる海人の子のもとにありとも、中納言子と名のり来る者あらば、と、願ひおぼすに、さもあらば、なかなかいとめでたかるべきことなり」、……

（巻一　六二頁）

ここに見出すことのできる「いかなる海人の子のもとにありとも」という表現は、男主人公たる中納言の父太政大臣が、中納言の子であればどんな卑しい女のもとにいるこどもでもかまわない、と述べるくだりにある。表現自体は、夕顔巻Bの「まことに海人の子なりとも」と類似してはいるものの、場面設定としてはかなり異なっていることが確認できよう。しかし、『夜の寝覚』の世界と『源氏物語』の世界がまったく隔絶したものでないことは、次の場面から見て取れる。

b「……いと角生ひ、目一つあらむが、なほ品のほどもあなづらはしからざらむ人聞きこそ、深き心ざしなくても、用ゐらるべきものにははべれ。さる基（もとゐ）さだめて、うち忍びては、海人の子をも尋ねはべらむ。……」

（巻一　四五頁）

これは、先に見たaの場面に先行するくだりで、宮中将が中納言に女性論を語る場面である。ここにも「海人の子」という表現が使われているのだが、これは直前の「さる基」＝歴とした正妻との対になっており、忍び妻といったようなイメージが付着している。これは、新編全集の頭注が「『源氏物語』夕顔巻の「海人の子なれば」がひびいている」と指摘する通り、夕顔のイメージが重ね合わせられたものだと考えられる。さらに、この宮の中将のことばは、次のような形で中納言に反芻される。

c「宮の中将の言ひしやうに、深き山の麓、さびしき蓬、葎の下より、ありし月影を見つけたらば、げにいみじき山人の女といふとも、苦しかるべきやうもなく、心の惹くにまかせても、もてなし迎へ寄せてむかし。……」　（巻一　五〇頁）

「海人」を「山人」とずらしながらも、表現的には、夕顔巻Bの「まことに海人の子なりとも」と繋がっていくものであり、ふたつの場面を合わせて読むことによって、『源氏物語』の世界が立ち現れてくる仕掛けになっていると言えよう。このような場面を踏まえて、aのくだりは描かれているのである。これは、『夜の寝覚』における、かなり高度な〈源氏物語取り〉であると言えよう。

しかし、問題なのは、このような『夜の寝覚』の意図を、後代の物語が必ずしも正確には理解していない、というところにある。それは、他でもない、『夜の寝覚』の改作本たる中村本『夜寝覚物語』によって明らかである。

「いかがはせん。さるべき宿世こそあるらめ。おのづから中納言殿、目とどめ給ふ事もあらば、さばかり殿の、『いかなる海人の子なりとも、この中納言の子と名のらば』と、よに心もとなく思し嘆きたるに、さやうの事もあらば、異事のめでたからんよりも、身にあまりたる幸ひにてこそあらめ」と、忍びつつ言ひゐたるに、……　（巻一　二三六頁）

この場面は、原作aの場面をほぼ忠実に模したものである。しかし、ここに置かれた「いかなる海人の子なりとも」の表現は、aの「いかなる海人の子のもとにありとも」と微妙な差異を見せる。つまり、原作の「海人の子」がひとまとまりで相手の女性を指していたのに対し、中村本の表現では、原作の「もとにあり」がなくなったことによって、「海人」が女性を、「子」がこどもを指すことになってしまうのである。厄介なことに、表面的な表現だけ見れば、中村本の「いかなる海人の子なりとも」は、原作の「いかなる海人の子のもとにありとも」よりも、源泉である『源氏物語』の「まことに海人の子なりとも」に近づいて見える。素直な〈源氏物語取り〉の用例にも見えるのだが、しかし、その内実は、『源氏物語』の用例を理解していない、誤用としか言えない用法であったのである。[6] さらに言えば、中村本は、原作におけるb・cに該当する場面を、まるごと欠いているのであって、「海人」＝卑しい者という共通理解を除けば、源泉である『源氏物語』とは隔絶したものとなってしまっていると言えよう。

今、『しのびね物語』・『夜の寝覚』に見たように、後代の物語

における〈源氏物語取り〉は、さまざまな趣向や工夫を凝らした上で、それぞれの作品世界に寄与するものとして再構成されている。そのような原典からの〈ずらし〉を、無自覚なままに他の物語が模倣することによって、『源氏物語』からの距離はますます遠いものとなってしまう。つまり、『源氏物語』の世界を取り込もうとする〈源氏物語取り〉という方法が、逆に、『源氏物語』から後代の物語を遠ざけてしまう一因となってしまっている、という一種ねじれた現象を指摘することができるのである。

たしかに、中世王朝物語において、『源氏物語』の影響は圧倒的である。しかし、そこには、原典からの明らかな変容と、時には隔絶すらも見出すことができるのであり、その部分にこそ、中世王朝物語の特徴が表れているように思われるのである。

次節以降、その特徴とは何であるかを具体的に考えていきたい。

二　「もののさとし」の表現史

『源氏物語』明石・薄雲両巻で描かれるさまざまな天変地異は、物語において、「さとし」・「もののさとし」[7]ということばによって表される。今、その全用例を引いておくこととする。

▼明石巻

①「京にも、この雨風、あやしき物のさとしなりとて、仁王会など行はるべしとなむ聞こえ侍りし。内に参り給ふ上達部なども、すべて道閉ぢて、政も絶えてなむ侍る」など、はかばかしうもあらず、かたくなしう語りなせど、……（五三頁）

②君おぼしまはすに、夢うつつ、さまざま静かならず、さとしのやうなる事どもを、来し方行く末おぼしあはせて、……夢の中にも父帝の御教へありつれば、又何ごとか疑はむ、とおぼして、御返りのたまふ。（五九頁）

③その年、朝廷にもののさとししきりて、物騒がしき事多かり。三月十三日、神鳴りひらめき、雨風騒がしき夜、帝の御夢に、院の帝、御前の御階のもとに立たせ給ひて、御気色いとあしうて、睨みきこえさせ給ふを、かしこまりておはします。（七三頁）

④去年より、后も御物の怪悩み給ひ、さまざまの物のさとししきり、騒がしきを、いみじき御つつしみどもをし給ふしるしにやよろしうおはしましける御目の悩みさへ、この頃重くならせ給ひて、物心細くおぼされければ、七月廿余日の程に、又重ねて、京へ帰り給ふべき宣旨くだる。（八一頁）

▼薄雲巻

⑤その年、大方、世の中さはがしくて、朝廷ざまにもののさとししげく、のどかならで、天つ空にも例に違へる月日星の光見え、雲のたたずまひありとのみ、世の人おどろく事多くて、道々の勘文ども奉れるにも、あやしく世になべてならぬ事どもまじりたり。（二二八頁）

周知の通り、明石巻では、須磨で起こった暴風雨が都にまで及び、後に光源氏を帰京へと導くきっかけとなる。また、薄雲巻では、この騒ぎの最中に藤壷が死去、冷泉帝が自身の出生を知る原

因となった出来事でもあった。つまり、『源氏物語』においては、物語の大きな転換点に置かれる事象として「もののさとし」があり、それは、③「朝廷に」・⑤「朝廷ざまに」ということばが冠せられることから明らかなように、神仏などのお告げが、非常に大規模な、朝廷レベルでの災害として顕現したものであった。①に描かれているように、朝廷での仁王会が行われたことなどからも、その被害の大きさは看取できるところであろう。

さて、中世王朝物語にもまた、「もののさとし」ということばは用いられている。しかしながら、次のような用例を見るとき、『源氏物語』との明らかな差異に愕然とするのではないか。

いかがして今一夜だに心やすく明かさんと思したばかるに、さとしならぬ事もさとしなるさまにやとりなされけん、この内蔵頭の家に、方違へたまふべきに、ある夜一夜出できて、わりなくかまへてあひ見給ふ心尽くしに、宇治川の遠の里思ひやられて、人目絶へて語らひ暮らし給ふ。

（『恋路ゆかしき大将』三四二頁）

女君になんとしてでも会いたい男君が、「さとしならぬ事もさとしなるさまに」取り繕って方違えの口実とし、逢瀬のきっかけを作るというくだりである。ここに描かれている「さとし」は、極めて個人的な「さとし」であり、しかも、「思したばかる」ということばからも明らかなように、実際に「さとし」があったのかどうかさえも疑わしい。『源氏物語』の「さとし」の用例とは、明らかに位相が違うものとなっているのである。

しかし、これをただちに、中世王朝物語の質・作者の力量不足などといった問題へと帰してはならない。俯瞰的に物語の表現史を辿るとき、実は、『源氏物語』の用例こそが異質であることに気付かされるのである。

かくて、新中納言、……小野よりものし給ひて。「いとうれしくものし給へる。『遅くおはせば、御迎へにまうでむ』となむ。ここはいとかく便なきを、日ごろ侍る所に物のさとしなどせしかば、先つ頃二条殿になむまかり渡りて侍るに、そこにおはして、聞こえしやうに、内に入りておはしませ」と聞こえ給へば、……

（七二八頁）

『うつほ物語』（国譲・中）、源実正が弟実忠を北の方に会わせるために、善意の嘘をつくという場面である。この用例は、「日ごろ侍る所」で起こった個人的なものであるという設定、実際に「さとし」は起こっていないという状況、男女の再会の口実になるという機能まで『恋路ゆかしき大将』と酷似しており、『うつほ物語』と『恋路ゆかしき大将』は、『源氏物語』の用例を飛び越え、一直線に繋がっていくかのようである。

『源氏物語』に先行する物語文学において、「もののさとし」の用例はこの『うつほ物語』の例が唯一である。[8] しかも、このくだりは話の本筋に無関係な場面に置かれており、「もののさとし」を物語の主筋を動かす大きな力として定位したのは『源氏物語』であったことが知られるわけだが、ここで再度強調しておきたいのは、『うつほ物語』における「もののさとし」が個人レベルの

「さとし」であるという点である。そもそも、「さとし」という語は、「古くより神の告げ知らせの意に用いられてい」[9]たのであって、公的・私的、両方の意味合いを持ちうるものだと考えられる。先に引いた『源氏物語』の用例においても、より細かく見ていけば、②は光源氏、④は弘徽殿大后の身に起こった「さとし」であり、朝廷レベルの「さとし」と連動しつつも、個人レベルの「さとし」として描かれていると考えればよいものだろう。だからこそ、ことさらに大規模な「さとし」には、「朝廷ざまに」と、その対象を明確化することばが付される必要があったのである。

だとすれば、「もののさとし」の表現史において、『源氏物語』こそが異質である最大の要因とは、その公的な性質によるものということになる。そして、このような公的な性質を持つ「さとし」の源泉とは、言うまでもなく、史書や男性の漢文日記に求められる。『小右記』（寛弘二年十一月十一日）の記事を挙げておく。

乙卯、参内、……蔵人広業朝臣伝綸旨於左府公、内宴可行乎、今年豊年、而天変怪異相仍、……六月以後天変廿九ケ度、又神社仏寺多有怪異、依定申内宴停止、……幸八省可被行如法仁王会、又七大寺延暦寺仁王経御読経、……　（二〇五頁）

ここで語られる天変は、「怪異」という語で表され、[10]「仁王会」が行われたという記事からも、『源氏物語』の「もののさとし」と共通する点が多く見られる。古注には、先に引いた①・⑤の用例に対して「怪異といふなり」（『岷江入楚』）という注が付されており、『源氏物語』における「もののさとし」と、漢文史料における「怪異」とが、同一の現象を表すものであることは明らかであろう。

すなわち、『源氏物語』に描かれた朝廷に対する「もののさとし」とは、それまで史書など、〈公〉的な書物にしか描かれなかったものを、〈私〉的な物語という場に取り込み、しかもそれに重要な意味・機能を持たせたものだったのである。『紫式部日記』における「この人は日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才あるべし」（二〇八頁）という一条天皇の評を引くまでもなく、これは、物語の表現史における『源氏物語』のひとつの達成であったと言っても過言ではない。

にもかかわらず、中世王朝物語は、この達成をなんら引き継いでいないのである。中世王朝物語における「さとし」の例を、もう一例引いておく。

今は心やすければ、ひとへにおりさせ給ひなんの御心まうけなり。同じ帝と申せど、あまねき御心にて、数ならぬ賤男までも思しはぐくみ、うるはしかりける御政を、惜しみ聞こえぬ人なし。殿なども、許したてまつり給はねど、もののさとししげければ、いかさまにものどかにと思して、四月朔日ごろに御国譲りあり。　（『苔の衣』一九頁）

帝の譲位に関わる箇所である。たしかに政治的な「もののさとし」ではあるが、このくだりにおいては、単なる付け足しのような感を拭えない。「もののさとし」以前から、「ひとへにおりさせ給ひなん」と、帝の譲位の決意は固く、動機付けとしてもやや弱

いうえに、この場面は物語の本筋にさしたる影響を及ぼさない。『源氏物語』の「もののさとし」と同列に論ずることはできないだろう。

たしかに、『源氏物語』がなければ、『苔の衣』のように、帝の譲位の場面に「もののさとし」の語が置かれることすらなかったかもしれない。しかし、それはもはや形骸化した、単なる指標にしかすぎない。『源氏物語』の達成は、強烈な印象だけは残したにせよ、その内実は受け継がれなかった。なぜ受け継がれなかったのかと言えば、端的に言ってしまうと、それが必要ではなかったから、ということになるのではないか。『源氏物語』の目指したものと、中世王朝物語の目指したもののズレを、この差異に感じることはできないだろうか。

次節において、もうしばらく「さとし」の用例をめぐって考察を続けたい。

三　「もののさとし」の変容

『源氏物語』と中世王朝物語の中間に位置する平安後期物語は、中世王朝物語が『源氏物語』をどのように摂取していったかを考える際、その過程を示すものとして、無視することはできない。今、『狭衣物語』の「もののさとし」の例を挙げておきたい。

i殿の内におびたたしきもののさとしあるを、物問はせたまへば、源氏の宮の御年あたらせたまひて、重くつつしませたまふべきよしを、あまた申したるを、いと恐ろしうおぼしめしおどろきて、さまざまの御祈りども、心ことに始めなどせさせたまふに、殿の御夢にも、「賀茂より」とて、禰宜とおぼしき人参りて、……

（巻二　二二九頁）

ii斎宮もあやしうさとしがちにて、宮もなやましげにしたまふよし聞こゆれば、嵯峨の院などもおぼし嘆くに、天照神の御気配、いちしるく現れ出でたまひて、さださだとのたまはすることどもありけり。

（巻四　三一三頁）

『狭衣物語』には、この二例の「もののさとし」を見出すことができる。iの「さとし」は源氏宮の斎院への卜定を、iiの「さとし」は狭衣大将の即位を、それぞれに促すものであって、極めて政治的かつ物語の展開そのものを左右する重要な場面に「さとし」が使われている。一見すると、『狭衣物語』の表現は、『源氏物語』の達成を忠実に引き継ぐもののように思われるのだが、しかし、波線を付した箇所からわかるように、iは「殿の内」で起こった「源氏の宮」個人に対するもの、iiも「斎宮」個人に対しての神託であったという点において、『源氏物語』における「朝廷ざま」の「もののさとし」とは、やや位相のズレを感じさせる。つまり、『狭衣物語』においては、物語を動かす力としての「もののさとし」の機能は保持しつつも、個人レベルの「さとし」へと、その内容の変化を見出すことができるのである。これは、『源氏物語』を十分に意識しつつも、新たな物語を切り開こうとする『狭衣物語』の意図的な操作であるのかもしれない。しかし、第一節で検討した通り、このような変容こそが後代の作品に対し

て重い意味を持つ。『夜の寝覚』の例も挙げておく。

七月一日、いとおどろおどろしきもののさとししたり。おぼしおどろきて、物問はせたまへば、「中の姫君の御年あたりて、重くつつしみたまふべし」となむ、あまたの陰陽師かんがへ申したり。（巻一　一三三頁）

物語の始発に置かれたこの「もののさとし」は、ヒロイン中君の物忌を告げるもので、その方違えに向かった九条の家において、男君とのあやにくな契りが結ばれることとなる。この契りから始まる中君の苦悩の半生こそが、『夜の寝覚』の主題であることは論ずるまでもない。すなわち、『夜の寝覚』における「もののさとし」とは、物語の方向性を決定づける非常に重い意味を持っていたのであった。そして、ここには政治的な意味合いは皆無である。あくまで中君個人に起こった、極めて私的な「もののさとし」が描かれている。つまり、『夜の寝覚』もまた、物語展開の動機としての「もののさとし」という『源氏物語』の達成は引き継ぎつつも、その内実を個人レベルへとシフトさせているのである。

そして、このような、物語展開の動機となりえ、かつ、あくまで私的な「もののさとし」こそが、中世王朝物語に受け継がれたものだったのである。

・七月の朔日、おそろしきさとしのありけるを、騒ぎつつ、占はせ給ふに、「御つつしみの事、おとひめ君の御年にあたりたる」と申す。（『夜寝覚物語（中村本）』巻一　三三三頁）

・いかなるにか、この御身にさとしめくことさへうちつづきものし給へば、故尚侍の君の御乳母、木幡なる所に尼になりておこなひ侍る所へ、御物忌とて、女房たち三四人具せきこえて渡したてまつり給ふ。（『木幡の時雨』一八三頁）

原作『夜の寝覚』の改作本たる中村本に「さとし」がそのまま使われているのは当然として（改作の取捨選択の中で、「さとし」の語が残った意味は重要視すべきだろう）、『木幡の時雨』においても、物語の冒頭に置かれた「さとし」が女君を方違えに導き、そこで男君との契りが結ばれるという展開が、『夜の寝覚』とほぼ同型で用いられていることを重視したい。あるいは、ここに、『夜の寝覚』の直接的な影響を説いてもよいのかもしれないが、しかし、前節で引いた『恋路ゆかしき大将』が、逢瀬の機会をつくる口実として「さとし」を用いていたように、〈さとし→方違え→男女の契り〉という展開は、物語のひとつの典型として一般化していたのではないか。つまり、中世王朝物語においての「もののさとし」とは、男女の逢瀬のきっかけとしてのみ、重要な意味を持つものであったのである。

足立繭子氏は、『苔の衣』における『狭衣物語』引用を検討し、「『苔の衣』は、断片的な『狭衣』引用の果てに、むしろ『狭衣』の表現もまたさらには『源氏』の表現さえもくぐり抜け、それらが指し示すのよりは、ずっと剝き出しの、ある種始源的な物語を提示させているのである」[11]と述べる。「始源的な物語」、それはやはり、〈男女の仲らい〉を主眼とした物語なのではなかろうか。

中世王朝物語の多くは、政治的な要素が薄い。帝はひとりの恋する男となり、朝廷は主人公を出世させる程度の働きしか持たない。それが、物語の冗漫さにも繋がり、時代の制約を受けた恋愛模様のみが語られる物語展開は、個々の作品の類似化を招く。しかし、そもそも物語が本来的に「女ノ御心ヲヤル物」（『三宝絵』序　六頁）であったのならば、そこに政治的な要素など必要なかったのである。むしろ、公／私両面の要素を、抜き差しならない物語の要素として取り込んだ『源氏物語』こそが異質であって、中世王朝物語は、本来あるべき物語の姿を取り戻している、とさえ言えるのかもしれない。「もののさとし」の変容は、中世王朝物語の指向性を端的に表すものとして捉えなければならないだろう。

足立氏は、さらに、「このような転倒したあり方は、例えば、「準拠例」と認定しさえすれば、「先例」（という始源）を捏造してしまいうる中世源氏学のあり方と、おそらくはパラレルなものだと思われる」と述べる。たしかに、両者のベクトルの向きは同じであろう。しかし、『源氏物語』の〈公〉の部分を肥大化させていったのが中世源氏学の姿勢であったとするならば、中世王朝物語は、それとは逆に、『源氏物語』の〈私〉の部分を肥大化させていった営為と捉えるべきではなかろうか。従来、中世王朝物語は、『源氏物語』の享受史において、明確に位置付けられてはこなかったが、鎌倉・室町の注釈書群と対極的な位置に、それは定められなければならないのだろう。

おわりに

以上、中世王朝物語における『源氏物語』享受をめぐって、いくつかの表現を辿りながら、その実相を考察した。『源氏物語』というひとつの達成を見ながらも、なぜその後も物語は生み出され続けたのか。そこにはなんらかの意図と目的があったはずである。中世王朝物語は、『源氏物語』から変容し隔絶しつつも、一面では『源氏物語』を肥大・発展させた営為としてあった。

本稿では、中世王朝物語総体としての特徴を探ることを主眼としたために、個々の作品解釈については、粗雑なものとなってしまった。理解の足らない点があれば、ご教示いただきたい。

なお、本稿での考察を通して、中世王朝物語における『夜の寝覚』の影響は、看過できないものがあるとの印象を持った。『夜の寝覚』そのものの享受についても不明な点は多いが、『源氏物語』から中世王朝物語に至る過程における大きな屈折点として、個々の作品への影響のみならず、文学史的な位置付けにも再考の余地があるように思われる。今後の課題として、考察していきたい。

注

（1）安達敬子「源氏物語という拘束―『苔の衣』・『木幡の時雨』の場合―」（『源氏世界の文学』清文堂 H17）

（2）辛島正雄「『木幡の時雨』再検討（その二）―『源氏小鏡』との関係を中心に」（『中世王朝物語史論 下巻』笠間書院 H13）

（3）その他にも、以下の例が確認できる。『狭衣物語』の例と合わせて列挙しておく。

『狭衣物語』巻一（狭衣中将＝飛鳥井女君）

また我がゆくへをも海人の子とだに名のらねば、心くらべにて、ただあはれにおぼえたまふままに、言ひ慰めつつ、この世ならぬ契りをぞかはしたまひける。（七〇頁）

『いはでしのぶ』巻一（二位中納言）

「よしや、いくほどなからん世は、かやうにて宿もさだめず、海人の子などのやうにてもあれかし。つゐの住みかと、いづくを思ふべきにてもあらず。なかなかならむあたりに、ことうるはしうとりこめられん心地よ。……」など、ありし忍ぶの通ひ路見つけられにし後より、いとどはかなきこともむつかしう、懲りぬる心地したまふけり。（一九一頁）

『松浦宮物語』巻二（弁少将橘氏忠＝唐鄧后）

「かばかりも夜な夜な見ゆる夢ならば別れの道を誰か急がむ

かうはかなき雲の行方ばかりには、立ちとまる頼みやはあらん」とのみ恨むれど、「秋風をだに待たぬ別れの道にはありか定めぬ海人の名のりも、まして」とつれなければ、恨みは尽きぬものから、言ひしらぬ思ひのみまさりて、……（二〇六頁）

（4）三角洋一氏は、散逸物語『あま人』をめぐって、「あまの子なれば名のるに足らず」「あまの子なりとも思い妻にせん」という世のたとえは、『あま人』にもとづいているのではないか」と述べる（『あま人』の成立と趣向」（『物語の変貌』若草書房 H8）が、もしかりに『あま人』が夕顔巻の場面になんらかの影響を与えるものであったとしても、先に見た『木幡の時雨』の例のように、明らかに夕顔巻と類似する用例を見れば、後代の物語における『源氏物語』の影響力は動かないと思われる。

（5）『しのびね物語』における『源氏物語』の影響については、以下の拙稿において論じた。参照願いたい。

拙稿「『しのびね物語』の基底―源泉としての『源氏物語』明石一族の物語―」（『詞林』25 H10・10）

（6）室町和歌に詠まれる「海人の子なれば」が、時に誤用されることが指摘されている（安達敬子「源氏詞の形成―源氏寄合以前―」（前掲（1）書））。「海人の子なりとも」の表現についても、和歌史との関わりがあるかもしれないが、いまだ調査が及んでいない。今後の課題としたい。ちなみに、『源氏物語』においては、「いかなる……とも」という表現は見出すことができない。しかし、中世王朝物語においては、慣用的な表現として一般化していたようで、『石清水物語』にも同様の例を見出すことができる。

まことに田舎人と言ひつるは違はざりけり、さらにさばかりの際とも覚えず、目も及ばず気高く、由ありつるさまは、いかなる海人の子なりと聞くとも、心劣りすべき心地せず。（上 一八頁）

（7）「もののさとし」は一語のように捉えられることも多いが、漠然とした「もの」の起こす「さとし」という意味であって、「さとし」単独の用例と同義と考えてよい。たとえば、「夢のさとし」という言い方はあるが、「夢のもののさとし」という用例は見出せないことから、「さとし」の主体を朧化した表現が「もののさとし」ということになるだろう。

（8）物語文学以外では、次の『蜻蛉日記』の用例が挙げられる。

・五月に、帝の御服脱ぎに（登子が）まかで給ふに、さきのごと「こなたに」などあるを、「夢にものしく見えし」など言ひて、あなたにまかで給へり。さてしばしば夢のさとしありければ、「違ふるわざもがな」とて、七月、月のいとあかき

に、かくのたまへり。　（上（安和元年）・八七頁）
・いかなるにかあらん、あやしうも心細う、涙浮かぶ日なり。「立たん月に死ぬべし」といふさとしもしたれば、この月やとも思ふ。　（下（天禄三年）・一九五頁）

ひとつめの用例は、兼家の同母妹たる登子の身に、ふたつめの用例は、道綱母の身に起こった「さとし」である。やはりここも、あくまで個人レベルでの「さとし」が描かれていると捉えればよいだろう。

(9)　森正人「モノノケ・モノノサトシ・物怪・怪異―憑霊と怪異現象とにかかわる語誌―」（『国語国文学研究』27 H3・9）

(10)　「怪異」という語の定義、「もののさとし」との関連性については、前掲注（9）論考参照。

(11)　足立繭子「転倒した『狭衣物語』―鎌倉物語『苔の衣』と《始源》なるものへの指向」（吉井美弥子編『〈みやび〉異説―『源氏物語』という文化』森話社 H9）

＊『源氏物語』の引用は新日本古典文学大系（岩波書店）、中世王朝物語の引用は鎌倉時代物語集成（笠間書院）にそれぞれ拠った。なお、読解の便宜を図り、表記を私に改めたところがある。その他の作品の引用テキストは、以下の通り。

・『うつほ物語』……室城秀之『うつほ物語 全』（おうふう）
・『狭衣物語』……新潮日本古典集成（新潮社）
・『夜の寝覚』・『紫式部日記』……新編日本古典文学全集（小学館）
・『蜻蛉日記』・『三宝絵』……新日本古典文学大系（岩波書店）
・『小右記』……増補史料大成（臨川書店）

［付記］本稿は、中古文学会関西部会第十回例会（平成十七年六月十一日・於奈良女子大学）および11 th International Conference of the BAJS（平成十七年八月三十一日・於ウィーン大学）での口頭発表に基づくものである。席上ご教示いただいた諸先生方に御礼申し上げます。

―神戸松蔭女子学院大学非常勤講師―